

## トカラ語 B《*Udānālankāra*》に於ける *Avadāna* 利用について

荻原 裕敏

キーワード: トカラ語 B 《*Udānālankāra*》 《*Avadānaśataka*》 説一切有部

### 要旨

西域北道一帯で流布した説一切有部の文献である《*Udānavarga*》に対する注釈として、トカラ語 B 仏典中には《*Udānālankāra*》と呼ばれる文献が知られている。本稿では、このトカラ語 B《*Udānālankāra*》に、『撰集百緣經』『長者七日作王緣』及び梵文《*Avadānaśataka*》所収の *Rājā* というタイトルで知られている *Avadāna* が引用されている点を指摘すると同時に、トカラ語《*Udānālankāra*》の成書過程に関する筆者の仮説を提示する。

### 1. 導入

現在までに部派帰属が確定しているトカラ語 B 仏典は、基本的に説一切有部に属している<sup>1</sup>。パーリ仏典の《*Dhammapada*》に対応する仏典として、この部派には《*Udānavarga*》(以下、Udv. とする)と呼ばれる仏典が知られているが、この仏典に関しては、西域北道一帯から多くの断片が発見されていることから、当時この地域に於いて、この仏典が広く受容されていた事実を窺う事ができる<sup>2</sup>。パーリ仏典中に《*Dhammapada*》に対する注釈書が見られるのと同様に、この Udv. に対する注釈書も、漢語・チベット語・トカラ語 AB のものが知られている。トカラ語 A の断片には文献に関する情報が残されていないが<sup>3</sup>、トカラ語 B による注釈書は *Dharmasoma* を著者とし、《*Udānālankāra*》(以下、UA とする)というタイトルであった事が、断片中に残された記載によって確認される<sup>4</sup>。この文献は、Udv. の各詩節に対して、仏陀が当該詩節を語った因縁譚や当該詩節に対する教理的解釈で構成されているが、いくつかの部分は、他言語による仏典中にパラレルの存在が指摘されている<sup>5</sup>。UA は様々な要素によって構成されているため、トカラ語仏典に反映される、所謂トカラ仏教を研究するに際して非常に重要な地位を占めるにも拘わらず、トカラ語文献研究の領域では、あまり研究されてこなかった文献と言える<sup>6</sup>。本稿では、この文献の Udv. IX 9 に対する因縁譚として与えられている物語が、『撰集百緣經』『長者七日作王緣』及び梵文《*Avadānaśataka*》(以下、Avs. とする)所収の *Rājā* として知られている *Avadāna* に対応する点について指摘すると同時に、トカラ語によって作成された UA の成書過程に関す

<sup>1</sup> 本稿では、所謂「根本説一切有部」を含めた広義の有部の意味で使用している。

<sup>2</sup> 梵文の校訂本としては、Bernhard (1965) を参照。

<sup>3</sup> トカラ語 A 断片については、Sieg and Siegling (1933) を参照。

<sup>4</sup> ドイツ所蔵断片 B28a4、B33a2、B64b7、B68a3 及びフランス所蔵断片 A3a3 を参照。

<sup>5</sup> *TochSprR(B) I:3-80* [German translation] に付された記載、及び 百済 (1972) を参照。

<sup>6</sup> トカラ語の UA のパラレルについての研究は、百済 (1972) 以降、進展は見られない。

る筆者の仮説を提示する。

## 2. トカラ語 B テキストと和訳

本節では、トカラ語 B の UA 中の Udv. IX 9 に対する因縁譚として与えられている物語のトカラ語 B テキストと和訳を提示する。この部分は B21a3-22b2 に対応する箇所であり、当該部分のローマ字転写及びドイツ語訳は、*TochSprR(B) I*: 34-37 [German translation], 36-38 [transliteration] で出版されている<sup>7</sup>。ただ、現在、この部分に対応する断片は一部を除いて失われているため、原文書を調査した上でのローマ字転写を提出することはできない<sup>8</sup>。ここで挙げるテキストは、*TochSprR(B) I* 及び Thomas (1983) を参考にしたものである。なお、以下に挙げるトカラ語 B テキストは transcription の形で提示されている<sup>9</sup>。

[トカラ語 B テキスト]<sup>10</sup>

B21

a

- 3 nanw = ālyek preke kartsai //// [†] walo māgatše a-  
 4 (jātašatru) //// (yo)laim wāšmontse devadatti šertwentsa (52) //// (†) prautka pelene  
 šwātsi yo-  
 5 (ktsi) //// (karsta) špā paine kšurs = ompostām tārkatši (†) //// (kly)auša ce<sub>u</sub> wāntre  
 prasamna-  
 6 (ke walo su †) //// (a)[jā]tašatruš<sub>u</sub> † tu yparwe šemo māgatāš(š)e (walo su †) ////  
 54 tarya lkwarwa šem pra-  
 7 (samnake) //// retke šālla kausašets rāskr[e] krāsa tu pra(samnaki) //// (šrāva)s[t]i  
 nke en[tā]r sū 55  
 8 [†] sū šem lāntā(šco) lā[nt] kakāte waipe(ccēš) //// yāmēm spa-

b

- 1 (ktām) //// (snai) k(e)š yasa wa(sa ekñi)[nta] † or(o)cc[e] t[i] //// snai keš  
 2 (5)[7] lyuwa š parkāsam walo štwāra kālymint[s]a (†) //// (prutke)[ma]nene

<sup>7</sup> Thomas (1983: 51-53, 179-181) は、このトカラ語 B 断片の転写とそれに対する注釈を提示しているが、注釈の一部を除いて、基本的には *TochSprR(B) I* のものと同一である。

<sup>8</sup> 現在残っている B22 の左端の部分については公開されている写真で読みを確認した。また、玉井 (2011: 97-98) では、写真が公開されていない部分については *TochSprR(B) I* の読みを採用しているが、Thomas (op.cit.) を参照していないため、筆者のテキストとは相違する箇所がある事をお断りしておく。

<sup>9</sup> 和訳文中、( ) で示した箇所は校訂者及び筆者によって推定された箇所を示す。また、*TochSprR(B) I* で与えられている訳文と相違する箇所については、和訳に対する注に於いて指摘する。

<sup>10</sup> 本稿で使用する表記法は、基本的に *TochSprR(B) I* で採用されている方法に従った。

[ ] : 不確かな箇所

( ) : 校訂者によって推定された箇所

//// : 写本の破損箇所

= : sandhi.

*kts[ai]tsñ(e)s = ostmem*

- 3 *//// (ā)ly[au]cemp = ālokālymi 58 padmakesar ñe[m] //// //// [pra]saṃnake walo sū ‡ po*
- 4 *//// cem ywarśkāññem ‡ āntene stamšlyi k<sub>u</sub>[s]e //// //// (ajātaśa)[tru] walo olypotse ‡ šamā*
- 5 *//// ntār wetāntse ‡ pakwāremmpa nauš //// //// (att)s(ai)k mayyo k<sub>u</sub>lātārme 60*
- 6 *//// (la)lāloš ‡ yākte skeyem ka šp sañi klā[yam] //// //// (ajātaśa)[tru] sū ‡ retkemp =*  
*orocce va-*
- 7 *(lo) //// //// (śem prasamṇa)[ke] māgatāṣṣe lānt wrattsai ‡ w[i]tār = ālyau(ce) //// ////*  
*māgatāṣṣe ‡ śānmyane*
- 8 *//// (62 pu)dñākte l[k]ātsi prasamṇake walo še[m] ‡ mā] //// //// ñi po = yšeñcai sām empe-*

## B22

a

- 1 *(le ‡) //// //// kausañ śrānā[m] wetāntām 63 epyaic klormem ce<sub>u</sub> bimbasārem lānt wrocce*  
*‡ cwi wa[r]sa soṃške tu //// //// (wñā-)*
- 2 *neś pudñākte (walo eše) ret[k]empa ‡ stāmaṃ pratiṃne mā š n<sub>u</sub>nok śan[mā]ṃ ciś retke 64 tu*  
*yparwe w(e)ña ślok pudñākte [l](āntāśco ‡) [c](owai tār)k(a)[n](am) ś(aumo)*
- 3 *kos (c)[wi] (rittetrā tumem no a)[l](y)[ai]k (c)owai tārkaṇa cowaicce ‡ cowai tārkauca cowai*  
*tārkauc māske(tār 6)5 śñār ekñentasa soytisi lāñco mā [campe](ṃ ‡)*
- 4 *(co)wai tārkaṇ(am ypauna) k<sub>u</sub>(s)aino alyeñkāts ‡ nautamne perne tumem yuksem ce<sub>u</sub> aly(ai)k ‡*  
*taiknes = erkatte lāñc māskeṃtr ontsoytñesa 60*
- 5 *(6) prasamṇake wlo (carka ajātaśatruṃ) lyāman = asāne wteṃtse wsā(ne) lantuññe ‡ ñaṣṣa*  
*śreṣṭakem kakātene akālkās ‡ tañ*
- 6 *(mai)[yya]ne ñiś sanam au(n)u takāwa (67 šuk kauñ yaṣāte su) [k](au)salne lantuññe ‡ walw*  
*alokālymi lyama šuk kauṃ epinte ‡ po ypauna k<sub>u</sub>(s)aimne yāmtsi yā-*
- 7 *(tka krent yāmor ‡) s[o]yša po wnołmem šwā(ts)i (yoktsi āyorsa 68 ‡) makte kakāte šuk*  
*kauṃ poysim sānkāmpa ‡ yātka śakrenta pāssi wnołmem y[ā](mo)rnta ‡ šuk kauñ ya-*
- 8 *(rkesa wa)[sa] wassi poysintse ‡ ponta(ts šamānets yāṣṣu wasa) [t]rīcīwār (69 ri)tāte akālk*  
*sorro(mp) [k](l)āya poysintse ‡ k<sub>u</sub>ce ñiś šuk kauntsa wsāwa wno-*

b

- 1 *(lmets s)[n](ai) meṃtsñe ‡ k<sub>u</sub>ce šp pudñākte (šuk kauṃ kakāwa sānkāmpa ‡) ce krent*  
*yā[m]or[s]a kālloym perne po[yš](iññe 70 eś lmoṣepi cwi waste tā[k]oym šaiṣṣe-*
- 2 *(ntse ‡ yāmṣa)ne poysī vyākarīto [ce<sub>u</sub>] (preke ‡ yāmor yāmṣa)sta wrocce palsko yonmasta ‡*  
*tākat ompostām po piś cmelṣets saim wās(t)e [7]1*

[和訳]

## B21

a

- 3 また或る時、良い … マガダ国の王、*Ajātaśatru* は  
4 … 悪友 *Devadatta* の教唆によって … (52) 彼は監獄に閉じ込めた。飲み物と食べ物  
5 … (彼は) ナイフで両足を (切った)。それから、解き放つ事を (命じた)。 … (かの)  
*Prasannaka* (王) は、この事を聞いた。  
6 … この *Ajātaśatru* の下に … それから、(かの) マガダの (王は)、やって来た。 … [54]  
三度、*Prasannaka*<sup>a</sup> は、やって来た。  
7 … (*Ajātaśatru* は)、コーサラ国の軍隊を打ち負かした。その事は *Prasannaka* を激しく苦し  
めた。 … そして、彼は *Śrāvastī* を掌握するだろう。 [55]  
8 … 彼は王の下へとやって来て、王に財産を与えた。 … 彼ら (若しくは、それら) は奉仕  
するだろう。

b

- 1 … 彼は数えきれない程の金と財産を与えた。大きい … 数えきれない程の  
2 … [57] 彼は四方に告示を発した。 … 老いのために (妨げられて)、家から  
3 … お互いに熱心に … [58] *Padmakesarin* という名前の (布陣)<sup>b</sup> … かの *Prasannaka* 王  
は … 全て  
4 … この中位の者達を (真ん中に配置すべきであり)、 … の者達を前に配置すべきである<sup>c</sup>。  
*Ajātaśatru* 王は非常に … 僧侶  
5 … 戦いの … 先に悪い者達と … 彼らの力は完全になくなるだろう。 [60]  
6 彼らは疲労し … 僅かな努力で敵達は倒れるだろう。 … かの *Ajātaśatru* 王は … 大軍  
とともに、(王は)  
7 … (*Prasannaka*) はマガダ国の王の前に(やって来た)。彼らは、お互いに戦った。 … マ  
ガダ (王) … 彼は、彼 (= *Ajātaśatru*) を縛った。  
8 … (62) *Prasannaka* 王は仏陀に会いに来た。 … 全知の者よ、恐ろしい敵は私によっ  
て …

B22

a

- 1 … 彼は私の年長の兵士達を殺した。 [63] かの偉大な *Bimbisāra* 王を思い出し、彼は、彼  
の息子を憐れんだ。それ …  
2 仏陀は彼に言いました。(王は)、その決心の下に軍隊とともに留まり、軍隊は再びあなた  
の下には行かないだろう。 [64] それから、仏陀は王に詩節を語りました。ある人にとって都  
合がいい間は、  
3 その人は盗む。しかし、それから、他の人々が盗人から奪う。盗みを行う者が盗まれる者と  
なる<sup>d</sup>。 [65] 王達は自分たち自身の財産に満足する事ができず、  
4 他人の国々や村々を奪う。彼の徳は消え去り、それから、他の人々が彼を打ち負かす。その

ようにして、王達は食欲さに苛立つ。[66]

- 5 *Prasannaka* 王は (*Ajātaśatru* を解き放ち)、彼を玉座に座らせ、(彼に) 再び王権を与えた。彼は *Śreṣṭ(h)aka* を召し、彼を願いへと誘った (= 彼の願いを訊いた)。あなたの力の下で私は敵を倒した。(67)
  - 6 彼は七日間に及ぶ *Kosala* 国の王権を (求めた)。彼は、七日間、王として熱心に続べました。彼は、全ての国々及び村々に (善行を) 行うように命じた。
  - 7 彼は、布施によって、全ての衆生の食べ物と飲み物を満足させた。(68) 彼は自ら、七日間僧伽とともに仏陀を招いた。十の善行を守るように人々に命じた。七日間、
  - 8 彼は、(敬意を以て) 仏陀に衣服を与えた。全ての (僧侶) に (施物として) 三衣を (与えました<sup>11</sup>)。69) 彼は願いを抱いて仏陀の下に跪いた。私は七日にわたって人々に安寧を与え、
- b
- 1 また、(七日間僧伽とともに) 仏陀を (招きました)。この善行によって、仏陀の徳を獲得しますように。[70] かの目の見えない人々の避難所となりますように。
  - 2 この (時)、仏陀は彼に授記を (行いました)。あなたは偉大な (行いを) 行い、偉大な思いを実現しました<sup>12</sup>。あなたは、後に全ての五種族の避難所となるでしょう。[71]

[注釈]

- a: この断片に現れるトカラ語 B の *prasannake* は、Skt. \**prasannaka*-の借用語である。この固有名詞に対して、*TochSprR(B) I*: 144 [transliteration] は *Prasenajit* を指すとしている。筆者は、フランス所蔵断片 PK NS 75b2 にも *prasannake* の用例を発見したが、本稿で検討している断片同様、対応する漢訳では「波斯匿王」とある。なお、フランス所蔵断片 PK NS 75 はトカラ語 B の広律の断片に属し、b2 以降は『十誦律』卷 14 「波逸提四十五」(T.23, no. 1435, 101a11-) に対応する<sup>11</sup>。この断片については、荻原 (2009b: 353-355) で扱った。
- b: *TochSprR(B) I*: 35 Anm. 10 [German translation] では、*Padmakesara* という名前の司令官 (Heerführer [= Skt. *senādhipatī*]) と推定されているが、前後の文脈から見て、これは以下に検討する *Avś.* に見られる *saṃgrāma*- 'troop, army, fight' (MW: 1129c) の名称であると判断される。なお、Thomas (1983: 179) でも *TochSprR(B) I* の解釈が踏襲されている<sup>12</sup>。ただ、*Avś.* にある *kesarī* (< Skt. *kesarin*-) からは、トカラ語 B の *padmakesar* は Skt. *padma-kesarin*-に由来するものと見られ、若干異なっている<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> Pinault (2007: 183) では *Vinaya* とするのみであり、対応箇所の比定には至っていない。

<sup>12</sup> トカラ語 B の *padmakesar* の解釈については、Adams (1999: 356) も *TochSprR(B) I* の解釈を踏襲しており、訂正を要する。

<sup>13</sup> トカラ語 B のテキストと *Avś.* との間に見られる相違は、テキスト伝承の相違に基づくものと推定されるが、トカラ語 B のテキストと『撰集百緣經』及び *Avś.* の関係については、次節で触れたい。また、トカラ語 B による «*Subhāṣitagaveśin-jātaṅka*» は『撰集百緣經』よりも *Avś.* に最も近いと、所謂「根本説一切有部」の系統に関係づけられるものの、一部の記述について異なっている事が明らかになっている。この断片については、荻原 (forthc.) を参照。なお、荻原 (forthc.) 脱稿当時は、出本 (2006) を参照する事ができなかったため、スコイエン・コレクション中に、«*Subhāṣitagaveśin-jātaṅka*» に対応する断片が含まれている点に言及する事ができなかった。こ

c: この箇所は、対応する『撰集百緣經』と Avs. では相違が見られる。即ち、「於陣前鋒。先置健夫。次置中者。後置劣者。」とする『撰集百緣經』に対して、Avs. では *tatra ye katarāh puruṣās te samgrāmaśirasi sthāpyante, ye madhyās te madhye, ye utkrstāh śūrapuruṣās te prsthata iti* とあり、トカラ語 B のテキストがどちらに一致していたのか、ここでは判断できない。

d: Udv. IX 9 (Bernhard 1965: 172) に対応。

*vilumpate hi puruṣo yāvad asyopakalpate |  
tato 'nye taṃ vilumpanti sa viloptā vilupyate ||*

e: Thomas (1983: 180) の推定に従った。

f: この箇所の解釈は、*TochSprR(B) I*: 37 [German translation] と Thomas (1983: 180-181) では異なっている。即ち、Thomas は、トカラ語 B の *wrocce* (*orotse* ‘great, big, large’ の単数斜格形) を、韻律の要求する音節配置 (4×12 syllables = 5/7) に従って、後続する *palsko* ‘mind, thought’ と関係づけるが、*TochSprR(B) I* では、先行する *yāmor* ‘deed, action’ と関係づけて解釈する。ここでは、筆者は両方の名詞に関係づけて解釈した。

### 3. パラレルとの比較について

前節で和訳を与えた物語のパラレルとしては、以下のものを指摘する事ができる。

[梵語]

«*Avadānaśataka*» 第 10 章 *Rājā* (Vaidya 1958: 26-29)

[漢訳仏典]

『撰集百緣經』第 10 章「長者七日作王緣」(T.04, no.200, 207b19-208a21)<sup>14</sup>

以下に、梵語及び漢訳仏典との対応を示す事とするが、引用中の下線部は、トカラ語 B のテキストとの対応の理解に資する箇所を示しており、正確に対応する箇所を示しているわけではない点に注意されたい。

[梵語]

*Rājā* (Vaidya 1958: 26-29)

*buddho bhagavān satkṛto gurukṛto mānitah pūjito rājabhī rājamātrair dhanibhiḥ pauraḥ śreṣṭhibhiḥ  
sāthavāhair devair nāgair yakṣair asurair garuḍaiḥ kinnarair mahoragair iti  
devanāgayaḥ śaśuragaruḍakimaramahoragābhyarcito buddho bhagavān jñāto mahāpunyo lābhī  
cīvarapiṇḍapātaśayanāsanagālanapratyayabhaiṣajyapariṣkāraṇām saśrāvakaśaṃghaḥ śrāvastyām  
viharati jetavane 'nāthapiṇḍadasyārāme | tena khalu samayena rājā prasenajit kauśalo rājā ca*

の点について補足させて頂く。

<sup>14</sup> 漢訳『撰集百緣經』の訳出年代については、出本 (1995 及び 2006: 209-213) を参照。なお、同著者による「*Avadānaśataka* の梵漢比較研究」(京都大学・博士論文) は筆者未見。

ajātaśatruḥ ubhāv apy etau paraspāram viruddhau babhūvatāuḥ | athā rājā ajātaśatruś caturaṅgalalakāyaṁ samnāhya hastikāyaṁ aśvakāyaṁ rathakāyaṁ pattikāyaṁ rājānam prasenajitam kauśalam abhiniriyāto yuddhāya ||

asrauṣid rājā prasenajit kauśalah: rājā ajātaśatruś caturaṅgalalakāyaṁ samnāhya hastikāyaṁ aśvakāyaṁ rathakāyaṁ pattikāyaṁ ca abhiniriyāto yuddhāyeti | śrutvā ca caturaṅgalalakāyaṁ samnāhya hastikāyaṁ aśvakāyaṁ rathakāyaṁ pattikāyaṁ rājānam ajātaśatruṁ pratyabhiniriyāto yuddhāya | atha rājñā ajātaśatruṇā rājñah prasenajitah kauśalasya sarvo hastikāyah paryastah, aśvakāyo rathakāyah pattikāyah paryastah | rājā prasenajit kauśalo jito bhīto bhagnah parājītaḥ parāprsthīkṛta ekarathena śrāvastīm pravistah | evaṁ yāvat trir api ||

atha rājā prasenajit kauśalah śokāgaram praviśya kare kapalam datvā cintāparo vyavasthitah | tatra ca śrāvastyām anyatamah śreṣṭhī ādhyo mahādhano mahābhogo viśfūrnaviśālaparigraho vaiśravanadhanasamudito vaiśravanadhanapratispardhī | tena śrutam yathā rājā prasenajit kauśalo jito bhagnah parāprsthīkṛtaḥ, ekaratheneha praviṣṭa iti | śrutvā ca punar yena rājā prasenajit kauśalas tenopasamkrāntah | upasamkramya rājānam prasenajitam kauśalam jayenāyusā ca vardhayitvā ca: kimarthaṁ deva śokah kriyate. aham devasya tāvat suvarṇam anuprayacchāmi, yena devah punar api yathestapracāranam kariṣyati | tena tasya mahān suvarṇarāśiḥ kṛtaḥ, yatropaviṣṭaḥ puruṣa utthitam puruṣaṁ na paśyati, utthito vā upaviṣṭam\* ||

atha rājñā prasenajitkauśalyena svavisaye carapurusaḥ samantata utsrstāḥ: śrūta janaprapvādān iti | yāvaj jetavane dvau mallāv anyonyam samjalpam kurutah: asti kesarī nāma samgrāmah | tatra ye kātārāḥ purusās te samgrāmaśirasi sthāpyante, ye madhyās te madhye, ye utkrstāḥ śūrapurusās te prsthata iti | tatas te rājñe iti vedītavantah | śrutvā ca rājā prasenajit kauśalas tathā caturaṅgalalakāyaṁ samnāhya hastikāyaṁ aśvakāyaṁ rathakāyaṁ pattikāyaṁ ca rājānam ajātaśatruṁ abhiniriyāto yuddhāya | tato rājñā prasenajitā kauśalena rājño 'jātaśatror vaidehīputrasya sarvo hastikāyah paryastah, aśvakāyo rathakāyah pattikāyah paryastah | rājānam apy ajātaśatruṁ vaidehīputram jitam bhītabhagnaparājītaṁ parāprsthīkṛtam jīvagrāham grhītvā ekarathe 'bhiropya yena bhagavāms tenopasamkrāntah | upasamkramya bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā ekānte niṣīdati | ekāntanisanno rājā prasenajitkauśalo bhagavantam ity avocat: ayam hi bhadanta rājā ajātaśatruḥ dīrgharātram avairasya me vairī, asapatnasya sapatnah | na cecchāmy enam jīvītād vyaparopayitum\*, yasmād vayasaputro 'yam bhavati | muñcāmy enam iti | muñca mahārājety uktvā bhagavāms tasyām velāyām gāthāṁ bhāṣate:

jayo vairam prasavati duḥkham śete parājitaḥ |

upaśāntaḥ sukham śete hitvā jayaparājayam\* || 1 ||

atha rājñah prasenajitah kauśalasyaitad abhavat: yaṁ mayā rājyam pratilabdham\*, tad asya śreṣṭhinah prasādāt\* | yaṁv aham enam vareṇa pravārayeyam iti | atha rājā prasenajit kauśalas tam śreṣṭhinam vareṇa pravārayati | sa kathayati: ākāṁkṣāmi varam\*, saptāham me yathābhirucitam rājyam anuprayacchateti | tato rājñā sarvavijite ghantāvaghosaṇam kārītam\*: dattam me śreṣṭhine saptāham

ekam rājyam iti | yāvat tena śreṣṭhinā buddhapramukho bhikṣusamghah saptāham bhaktenopanimantritah, rājā ca prasenajit saparivārah | yāvantaś ca kāsikośalesu janakāyāh prativasanti, teṣāṃ dūtasampreṣanam kṛtam\*: saptāham yūyam sakalā yatheṣṭacārīnah sukhasparsam viharata | kimcid āgatya buddham śaranam gacchata, dharmam ca bhikṣusamgham ca | māmakam ca bhojanam muñjānās tathāgatam paryupāsadhvam iti | tena saptāham bhagavān saśrāvakasamgho mahatā satkārena satkṛtah, bahūni ca prāṇisatasahasrāni kuśale niyojitāni | saptāhasyātyayena bhagavatah pādavor nipatya cetanām puṣṇāti, pranidhim ca cakāra: anenāham kuśalamūlena cittotpādena devadharmaparivyūḡgena ca andhe loke anāyake aparināyake buddho bhūyāsam afirmānām satvānām tārayita, amuktānām mocayitā, anāśvāstānām āśvāsayitā, aparinirvṛtānām parinirvāpayitēti ||

atha bhagavāṃs tasya śreṣṭhino hetuparaṃparāṃ karmaparaṃparāṃ ca jñātvā smitaṃ prāvīrakārṣīt | dharmatā khalu yasmin samaye buddhā bhagavantaḥ smitaṃ prāvīṣkurvanti tasmin samaye nīlapīṭalohitāvadātā arcīṣo mukhān niścārya kāścid adhastād gacchanti, kāścid upariṣṭād gacchanti | yā adhastād gacchanti, tāḥ saṃjīvaṃ kālasūtraṃ saṃghātaṃ rauravaṃ mahārauravaṃ tapanam pratāpanam avīcim arbudaṃ nirarbudaṃ aṭaṭaṃ hahavaṃ huhuvaṃ utpalaṃ padmaṃ mahāpadmaṃ narakān gatvā ye uṣṇanarakās teṣu śītibhūtā nipatanti, ye śītanarakās teṣuṣṇībhūtā nipatanti | tena teṣāṃ satvānāṃ kāraṇāviśeṣāḥ pratiprasrabhyante | teṣāṃ evaṃ bhavati: kiṃ nu vayaṃ bhavanta itaś cyutāḥ āhosvid anyatropapannā itī | teṣāṃ prasādasamjananārthaṃ bhagavān nirmitaṃ visarjayati | teṣāṃ nirmitaṃ drṣṭvaivaṃ bhavati: na hy eva vayaṃ bhavanta itaś cyutā nāpy anyatropapannāḥ | api tv ayam apūrvadarśanaḥ satvaḥ, asyānubhāvenāsmākaṃ kāraṇāviśeṣāḥ pratiprasrabdhā itī | te nirmite cittam abhiprasādya tan narakavedanīyaṃ karma kṣapayitvā devamanuṣyeṣu pratisandhiṃ grhṇanti, yatra satyānāṃ bhājanabhūtā bhavanti | yā upariṣṭād gacchanti, tāś cāturmahārājikāṃs trayastrīmśān, yāmāṃs tuṣītān nirmānaratīn paranirmitavaśavartino brahmakāyikān brahmapurohitān mahābrahmaṇaḥ parītābhān apramāṇābhān ābhāsvarān parītāsubhān apramāṇasubhān śubhakarīśnān anabhrakān puṇyaprasavān brhatphalān abhrān atapān sudṛśān sudarśanān akaniṣṭhān devān gatvā anityaṃ duḥkhaṃ śūnyam anātmety udghoṣayanti, gāthādvayaṃ ca bhāṣante:

ārabhadhvaṃ niṣkrāmata yujyadhvaṃ buddhaśāsane |

dhunīta mṛtyunaḥ sainyaṃ naḍāgāraṃ iva kuñjaraḥ || 1 ||

yo hy asmin dharmavinaye apramattaś carīṣyati |

prahāya jātisaṃsāraṃ duḥkhasyāntaṃ karīṣyati || 2 || itī

atha tā arcīṣas trisāhasramahāsāhasraṃ lokadhātum anvāhiṇḍya bhagavantam eva prṣṭhataḥ prṣṭhataḥ samanugacchanti | tad yadi bhagavān aṭītaṃ karma vyākartukāmo bhavati, bhagavataḥ prṣṭhato 'ntardhīyante | anāgataṃ {karma} vyākartukāmo bhavati, purastād antardhīyante | narakopapattiṃ vyākartukāmo bhavati, pādātale 'ntardhīyante | tiryagupapattiṃ vyākartukāmo bhavati, pārṣṇyām antardhīyante | pretopapattiṃ vyākartukāmo bhavati, pādānguṣṭhe 'ntardhīyante | manuṣyopapattiṃ vyākartukāmo bhavati, jānūnor antardhīyante | balacakravartirājyaṃ vyākartukāmo bhavati, vāme karatāle 'ntardhīyante | cakravartirājyaṃ vyākartukāmo bhavati, dakṣiṇe karatāle



'ntardhīyante | devopapattiṃ vyākartukāmo bhavati, nābhyām antardhīyante | śrāvakabodhiṃ  
vyākartukāmo bhavati, āsyē 'ntardhīyante | pratyekabodhiṃ vyākartukāmo bhavati, iṣṇāyām  
antardhīyante | anuttarāṃ samyaksambodhiṃ vyākartukāmo bhavati, uṣṇīṣe antardhīyante ||

atha tā arcīṣo bhagavantam triḥ pradakṣiṇīkṛtya bhagavata uṣṇīṣe 'ntarhitāḥ | athāyusmān ānandaḥ  
kṛtakarapuṣo bhagavantam papraccha:

nānāvidho raṅgasahasracitro

vaktrāntarān niṣkasitaḥ kalāpaḥ |

avabhāsitā yena diśaḥ samantād

divākareṇodayatā yathaiva || 3 ||

gāthāś ca bhāṣate:

vigatodbhavā dainyamadaprahīṇā

buddhā jagaty uttamahetubhūtāḥ |

nākāraṇam śaṅkhamṛṇālagauram

smitam upadarśayanti jinā jitārayaḥ || 4 ||

tatkālam svayam adhigamya vīra buddhyā

śrotṛṇām śramaṇa jinendra kāṅkṣitānām\* |

dhīrābhir munivṛṣa vāgbhir uttamābhir

utpannam vyapanaya saṃśayaṃ śubhābhiḥ || 5 ||

nākāsmāl lavaṇajalādrirājadhairyāḥ

saṃbuddhāḥ smitam upadarśayanti nāthāḥ |

yasyārthe smitam upadarśayanti dhīrāḥ

taṃ śrotuṃ samabhilaṣanti te janaughāḥ || 6 || iti

bhagavān āha: evam etad ānanda, evam etat | nāhetvapratyayam ānanda tathāgatā arhantaḥ  
samyaksambuddhāḥ smitam prāviṣkurvanti | paśyasi tvam ānanda anena śreṣṭhinā tathāgatasya  
saśrāvakasamghasyaivamvidham satkāram kṛtam\*, mahājanakāyam ca kuśale niyuktam\* | evam  
bhadanta | esa ānanda śreṣṭhī 'nena kuśalamūlena cittotpādena devadharmaparitṛyāgena ca  
trikalpāsamkhyegasamudānītām bodhim samudāniya mahākaruṇāparibhāvitāḥ sat pāramitāḥ paripūrva  
abhayaprado nāma samyaksambuddho bhaviṣyati, daśabhir balaiś caturbhir vaiśāradyais tribhir  
āvenikaiḥ smṛtyupasthānair mahākaruṇayā ca | ayam asya devadharmo yo mamāntike cittaprasāda iti ||  
idam avocad bhagavān | ātmanasas te bhikṣavo bhagavato bhāṣitam abhyanandan\* ||

[漢訳仏典]

『撰集百緣經』卷1「長者七日作王緣」

「佛在舍衛國祇樹給孤獨園。時波斯匿王。及阿闍世。恒共忿諍。各集四兵。象兵馬兵車兵步兵。而共交戰。時波斯匿王軍眾悉敗。如是三戰。軍故壞敗。唯王單己道入城內。甚懷憂慘。愧恥委地。忘寢不食。時有長者。多財饒寶。不可稱計。聞王愁惱。來白王言。奴家多有金銀珍寶。恣

王所用。可買象馬賞募健兒。還與戰擊。可得勝彼。今者何故。憂慘如是。王即然可。大出珍寶。奉上與王。募索健兒。遍行諸國。以求策謀。有一健夫。來應其募。到祇洹門中。見二將士共論戰法。一將士言。於陣前鋒。先置健夫。次置中者。後置劣者。聞是語已。還歸白王。具說將士所論兵法。王聞是語。即集四兵。如彼所論。健者置前。劣者在後。尋共交戰。即破彼軍。獲其象馬。即便捉得阿闍世王。大用歡慶。與共同載羽寶之車。將詣佛所白言。世尊。我於彼王。長夜之中。初無怨嫉。而彼於我。返生怨讐。然阿闍世其父先王。是我親友。不忍害命。今欲放去還歸本國。爾時佛讚波斯匿王。善哉善哉。於親非親。心常平等。賢聖所讚。即便為王而說偈言。

負則生憂懼 勝則懷欣慶  
汝今放彼王 二俱生歡喜  
若能息勝負 最妙第一樂

時波斯匿王聞佛世尊說是偈已。即放阿闍世。還詣本國。自歸舍衛。而自念言。吾今所以戰鬪獲勝。由彼長者資我珍寶。賞募將士。今得勝耳。作是念已。即召長者。而告之言。吾由汝故。資我珍寶賞募勇健。戰鬪得勝。我今當還報卿之恩。恣汝所願。是時長者跪白王言。施我無畏。敢有所道。王即答曰。聽汝所說。長者白言。我今願欲代王七日治政天下。王尋聽許。滿長者願。即為擊鼓立正為王。擊鼓唱令。使其境內咸令聞知。皆得自在。尋即遣使勅諸小王。各令七日罷諸王課。來朝拜我。歸依三寶。請佛供養。七日既滿。甚大歡喜。即便以身五體投地。發大誓願。持此七日作王功德。於未來世。盲冥眾生。為作眼目。無歸依者。為作歸依。無救護者。為作救護。無安隱者。為作安隱。無解脫者。為作解脫。未涅槃者。令使涅槃。發是願已。佛便微笑。從其面門。出五色光。繞佛三匝。還從頂入。爾時阿難前白佛言。如來尊重。不妄有笑。以何因緣。今者微笑。唯願世尊。敷演解說。佛告阿難。汝今叵見彼大長者七日作王不。阿難白言。唯然已見。彼大長者。由請我故。於未來世。過三阿僧祇劫。當得作佛。號曰最勝。廣度眾生。不可限量。是故笑耳。佛說是長者作王緣時。有得須陀洹者。斯陀含者。阿那含者。阿羅漢者。有發辟支佛心者。有發無上菩提心者。爾時諸比丘聞佛所說。歡喜奉行。」(T.04, no.200, 207b19-208a21)

トカラ語 B のテキストと二種のバラレルは完全に一致しているわけではなく、叙述の精粗や一部の記述について一致しない箇所が見られるものの、以上の対応が示すように、B21a3-22b2 に引用された物語は、『撰集百緣經』「長者七日作王緣」及び Avs. 所収の *Rājā* に対応する事が窺えよう<sup>15</sup>。

また、前節で触れたように、トカラ語 B のテキストと『撰集百緣經』及び Avs. では若干一致しない点が確認されたが、これらの点を除けば、全体的にトカラ語 B のテキストは、『撰集百緣經』に近い事が上での比較から窺う事ができる。特に仏陀が授記を与える際の描写がトカラ語 B のテキストでは非常に簡潔であり、トカラ語 B のテキストがこの部分を改変した可能性も否定できないが、出本 (2006: 212) で示されている Chronology 中の増広 (Revision of the Sanskrit

<sup>15</sup> 百濟 (1972) と同様に、このバラレルが説一切有部の文献と関係づけられる点に注目されたい。なお、Avs. の部派帰属については、Hartmann (1985) 及び出本 (1998) を参照。

Avs.) が行われる前のテキストを反映している可能性も指摘する事ができよう<sup>16</sup>。

#### 4. トカラ語 UA の成書過程に関して

前節では、トカラ語 B の UA 断片 B21a3-22b2 で因縁譚として与えられている物語が、『撰集百緣經』「長者七日作王緣」及び Avs. 所収の *Rājā* に対応する点について検討した。ここでは、この事実を手がかりとして、漢訳仏典並びにパーリ仏典を参考にトカラ語 UA の成書過程について検討する。

本稿で検討している *Ajātaśatru* と *Prasenajit* の戦いの物語は、漢訳仏典並びにパーリ仏典では、Udv. 中の特定の詩節と結びついている。筆者が調査した範囲では、それは以下のように纏める事ができる<sup>17</sup>。

##### [パーリ仏典]

SN I 3.2.4.: Udv. XXX 1

SN I 3.2.5.: Udv. IX 9, 11

Pali 注釈: Udv. XXX 1<sup>18</sup>

##### [漢訳仏典]

『雜阿含經』「1236 經」: Udv. XXX 1

『雜阿含經』「1237 經」: Udv. IX 9

『別譯雜阿含經』「63 經」: Udv. XXX 1

『別譯雜阿含經』「64 經」: Udv. IX 9, 10

『出曜經』: Udv. XX 19

『撰集百緣經』「長者七日作王緣」: Udv. XXX 1

<sup>16</sup> 出本 (op.cit.) の Chronology では、『撰集百緣經』の漢訳 (Chinese translation of the Avs.) は 5th (middle) ~ 6th (end) century A.D. となっている。トカラ語 B の UA の成立年代は確定できないが、ms.D と称されている写本には、Archaic の段階に分類される形式が見られる点が指摘されている (cf. Peyrot: 2008: 204-206, 219)。トカラ語 B の Archaic は 4 世紀から 5 世紀後半に位置づけられており、トカラ語 B の UA の成立年代を考える上で参考となる。

また、出本 (op.cit.: 215-217) に拠れば、ドイツ所蔵西域北道将来梵語断片の SHT I 318a は Avs. に関係づけられるが、Avs. よりも簡略なテキストであるという。SHT (V): 218 の記載に拠れば、この断片で使用されている Brāhmī 文字は Schriftypus VI に分類され、発見場所は、恐らく Shorchuk であるとされている。トカラ語 B の UA については、Kucha の Kizil や Duldur-akhur 発見の断片も知られているが、大部分は Shorchuk 発見のものであり、このような梵本が当時トカラ仏教に知られており、そこから引用された可能性も指摘される。なお、西域北道将来の梵語断片で使用される Brāhmī 文字については、Sander (1968: 181-183, 1986) を参照。

一方、出本 (op.cit.: 215, fl. 32) で注記され、その後、SHT (X): 399 で修正版が出版された SHT I 35 (K569) は Avs. に比定されるが、SHT (I): 26 に拠ると、この断片は Kizil で発見されているだけでなく、Schriftypus III (同書所収の Tafel 18 も参照) に分類される Brāhmī 文字で書写されており、比較的早い時期に Avs. が Kucha に伝えられていた事を窺わせる。ただし、トカラ語 B の UA に含まれるテキストが、当時トカラ仏教に知られていた梵文の Avs. から引用されたとは限らず、このような Avadāna が単経として、または現在は失われた Avadāna 集成の一部として流通していた可能性も排除されない。

<sup>17</sup> 『雜阿含經』「1236 經」「1237 經」に関係づけられる Udv. の詩節は、榎本 (1994: 51) にも指摘されている。以下の対応において、パーリ仏典の SN I 3.2.4. は漢訳の『雜阿含經』「1236 經」と『別譯雜阿含經』「63 經」に、SN I 3.2.5. は『雜阿含經』「1237 經」と『別譯雜阿含經』「64 經」に対応する。なお、ここで挙げた個々のテキストと Udv. の詩節については、本稿末尾の [Texts] を参照。

<sup>18</sup> Cf. Norman (1970: 259-260)。

[梵語]

Avś.: Udv. XXX 1

上の表からは、この物語が Udv. XXX 1 及び Udv. IX 9 と結びついている事が窺える。先行研究に拠ると、有部の Udv. は「有部内の法教と伝承される人物が、自派の \*Udāna の全体と \*Dharmapada の大部分を合成し、さらに自派の諸 Āgama、特に S[āmyukta] Ā[gama] の Saṃgītavarga (Pāli の S[āmyutta] N[kāya] の Sagāthavagga に相当する) から多くの詩句を取り入れ」<sup>19</sup>、編纂されたものである。パーリ仏典の SN や漢訳『雜阿含經』に、Udv. の詩句が見出される事は、このような成立過程を裏付けるものと言える。

また、この阿含經典中に語られる *Ajātasatru* と *Prasenajit* の戦いを題材とする物語は、*Prasenajit* の敗北と *Prasenajit* の勝利という二つの異なる物語として語られ、前者の物語は Udv. XXX 1 と、後者の物語は Udv. IX 9 に結びついている。そして、『撰集百緣經』「長者七日作王緣」及び Avś. 所収の *Rājā* は、この二つの物語を結合させたものと言える。一方、ここで、パーリ仏典の《*Dhammapada*》の注釈、及び Udv. の注釈として知られている漢訳『出曜經』<sup>20</sup>に見られる *Prasenajit* の敗北の物語に注目すると、前者では Udv. XXX 1 に、後者では Udv. XX 19 の因緣譚として与えられている。

以上のような対応関係に注目するならば、ある程度、特定の物語と結びついた形で伝承されていた Udv. の詩節が、トカラ仏教の側で注釈を作成する際に、ある詩節は、その関係が維持され<sup>21</sup>、ある詩節については、別の物語と結びつけられて一書に纏められ、それが、現在我々が見ているトカラ語の UA として成立したのではないかと推定する事が可能である。そして、この場合、ある詩節が別の物語と関係づけられる際の動機は、詩節と物語のテーマの類似や共通性であったと考えられる<sup>22</sup>。このような推定が成立するならば、本稿で検討している Udv. IX 9 は、本来パーリ仏典の SN I 3.2.5 に対応する有部の物語と結びついていたが、トカラ仏教に於ける注釈作成の際、物語の同一性を契機として、『撰集百緣經』「長者七日作王緣」及び Avś. 所

<sup>19</sup> 榎本 (1980: 933)。

<sup>20</sup> 『出曜經』の部派帰属や成立過程については、平岡 (2007a) を参照。

<sup>21</sup> 詩節と物語の関係が維持されていると推定されるものとして、百濟 (1972) によって解明された Udv. XV 1 と、それに付されたと推定される教理解釈を挙げる事ができる。トカラ語 B 断片 Nr. 41 は注釈対象となっている詩節を欠いているが、指摘されているように、比定された『阿毘達磨大毘婆沙論』の対応箇所 (T.27, no. 1545, 132a9-) には、当該の議論の後に Udv. XV 1 が引用されている (T.27, no. 1545, 135b19-20)。そして、この詩節に対して教理解釈を施すという点では、『出曜經』卷 17 (T.04, no. 212, 698b6-) も同様である。因みに、筆者の仮説に立てば、この百濟 (1972) によって「アビダルマ的註解」と称されている部分は、*Dharmasoma* によって著述されたものではなく、既存の文献、若しくは伝承からの引用と解釈される。

<sup>22</sup> トカラ語仏典中の類似の例としては、トカラ語 A による《*Punyavanta-jātaka*》における『雜阿含經』「1283 經」の引用を挙げる事ができる。そこでは、主人公の一人である *Śilpavān* によって『雜阿含經』「1283 經」が引用されており、その韻文はトカラ語 A の *amok* 'art' で始まるが、梵文の対応箇所は *śilpa*- 'art' であり、この韻文を引用した主人公の名前と一致する。この韻文については、荻原 (2009a) を参照。このような例は、インド語による仏教が主流であったと考えられるトカラ仏教における仏典作成過程の一端を窺える重要な例と言える。なお、梵語仏典に於いても、類似のテーマの韻文を挿入する例が知られている。この点については、榎本 (1982) を参照。

収の *Rājā* に語られる物語と改めて関係づけられたのではないかと考える事が可能となる<sup>23</sup>。

この場合、何故に物語の置き換えが必要であったかという点について確実な理由は提示できないが、恐らく、Udv. の注釈として UA が作成された背景と関係していると思われる。即ち、この文献は、ある程度民衆教化を念頭に置いて作成されたため、民衆教化により適した本縁部に属する *Avadāna* が利用され<sup>24</sup>、本来の物語と置き換えられたのではないだろうか、と筆者は推定している<sup>25</sup>。

以上に推定したような物語の置き換えが、トカラ仏教に於ける UA の作成過程で行われていたとするならば、現在知られているトカラ語の UA の内、Udv. の詩節の部分とそれぞれの詩節に付された因縁譚や教理的解釈と言った個別の部分についてはインド語原典を想定する事が可能であっても、トカラ語の UA 全体に対応するインド語原典は存在していなかったと考えるべきである<sup>26</sup>。

## 5. 結論

本稿では、トカラ語 B の UA 中の Udv. IX 9 に対する因縁譚として与えられている物語が、『撰集百緣經』「長者七日作王緣」及び Avs. 所収の *Rājā* に語られる物語と一致する点について検討した。また、このパラレルを参考とする事で、この物語の解釈について若干の訂正を加える事ができた。

一方、トカラ語 B の UA に *Avadāna* が引用されている事に基づいて、トカラ仏教の側で、Udv. に対する注釈として UA が作成された際、詩節に対する因縁譚として結びついていた物語の置き換えが行われた可能性を指摘した。筆者の推定が正しいならば、トカラ語の UA 全体に対応するインド語原典は存在しておらず、彼らに知られていた仏典や伝承に基づいて編纂されたものであり、そこに含まれる Udv. の詩節と因縁譚や教理的解釈と言った個別の部分についてののみインド語原典を想定する事が可能であると考えられる<sup>27</sup>。

なお、本稿で論じたトカラ語の UA の成書過程に関する推定が妥当であるか否かについては、より多くの UA に取り込まれているパラレルの解明が必要であり、今後も引き続いて調査を継

<sup>23</sup> 残念ながら、トカラ語の UA には、Udv. XXX I に対応する箇所は残されておらず、どのような注釈が与えられていたのか判断できない。

<sup>24</sup> 『撰集百緣經』「長者七日作王緣」及び Avs. 所収 *Rājā* の後半では、仏陀と仏教僧団に対する奉仕による功德が説かれている。

<sup>25</sup> トカラ語の UA で置き換えが為された理由の最終的な説明は、この文献も含めて、どのようにトカラ語仏典の存在を解釈するかという問題と密接に関係している。即ち、トカラ語仏典が必要とされた理由やその対象が誰であったのか、どのように利用されていたのかといった点からも総合的に考察されるべきである。

<sup>26</sup> *TochSprR(B) I: 5* [transliteration] や Thomas (1983: 19-20) では、*Dharmasoma* の出自についての見解は異なるものの、トカラ語の UA が梵文原典からの翻訳であるとする点は一致している。また、平岡 (2007) に拠れば、漢訳『出曜經』に関しても、『出曜經』全体のインド語原典は存在せず、編纂過程でその他の文献から題材が取られたものであり、中国で編纂されたと考えるべき点が指摘されている。ただ、筆者は、UA の注釈の全てが他の文献・伝承からの引用であると見ていたわけではなく、*Dharmasoma* によって書かれた部分が含まれている可能性を排除するわけではない。

<sup>27</sup> 筆者は、ベルリン所蔵の西域北道将来梵語断片中にトカラ語の UA と関係づけられる断片が存在している事に気づいた。この断片と、それを手がかりとして窺う事ができるトカラ仏教に伝えられたと推定される阿含經典の問題については、荻原 (2011) を参考。

続して行きたい。

## 文献略号

Avś. = *Avadānaśataka*.

UA = *Udānālankāra*.

SN = *Samyutta-nikāya*.

Udv. = *Udānavarga*.

## 参考文献

Adams, Douglas Q. (1999) *A Dictionary of Tocharian B*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi.

Bernhard, Franz (1965) *Udānavarga*. Band I. Einleitung, Beschreibung der Handschriften, Textausgabe, Bibliographie. (Sanskrittexte aus den Turfanfunden. X). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

出本充代 (1995) 「『撰集百緣經』の訳出年代について」『パーリ学仏教文化学』8: 99-108.

出本充代 (1998) 「*Avadānaśataka* に挿入された阿含經」『パーリ学仏教文化学』11: 31-40.

出本充代, Demoto Mitsuyo, (2006) Fragments of the *Avadānaśataka*. In: Jens Braarvig (ed.), *Manuscripts in the Schøyen Collection, Buddhist Manuscripts Volume III*. Oslo: Hermes Publishing, 207-244.

榎本文雄 (1980) 「*Udānavarga* 諸本と雜阿含經、別訳雜阿含經、中阿含經の部派帰属」『印度學佛教學研究』28-2: 931-933.

榎本文雄 (1982) 「雜阿含經 1299 經と 1329 經をめぐって」『印度學佛教學研究』30-2: 957-963.

榎本文雄, Enomoto Fumio, (1994) *A Comprehensive Study of the Chinese Saṃyuktāgama. Indic Texts Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama as Found in the Sarvāstivāda-Mūlasarvāstivāda Literature, Part 1: \*Saṃgītinipāta*, Kyōto: Kacho Junior College.

Feer, Leon (1884)[2006] *Samyutta-nikāya. Vol. I*. London: Pali Text Society.

Hartmann, Uwe-Jens (1985) Zur Frage der Schulzugehörigkeit des *Avadānaśataka*. In: Heinz Bechert (ed.), *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur. Erster Teil (Symposium zur Buddhismusforschung, III, 1)*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 219-224.

平岡聡 (2007) 「『出曜經』の成立に関する問題」『印度學佛教學研究』55-2: 842-848.

百濟康義 (1972) 「トカラ語仏典 *Udānālankāra* におけるアビダルマ的註解」『仏教学研究』29: 37-62.

Lévi, Sylvain (1933) *Fragments de textes koutchéens (Udānavarga, Udānastotra, Udānālankāra et Karmavibhaṅga) publiés et traduits avec un vocabulaire et une introduction sur le «Tokharien»*. Paris: Société Asiatique.

水野弘元 (1953) 「ウダーナと法句」『駒澤大學學報』復刊 2: 3-24.

MW = Monier-Williams, Monier (1899) *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.

中谷英明 (1988) 『スバシ写本の研究』京都: 人文書院

Norman, H. C. (1970) *The Commentary on the Dhammapada*. Vol.3. London: Pali Text Society.

荻原裕敏 (2009a) 「トカラ語 A<*Puṇyavanta-Jātaka*>に於ける阿含經典の引用について」『東京大

学言語学論集』28: 133-171.

荻原裕敏, Ogihara Hirotoši, (2009b) *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B* (unpublished doctoral dissertation. Paris, EPHE).

荻原裕敏 (2011) 「『阿蘭那經』に比定された SHT 所収梵語断片について」『東京大学言語学論集』31.

荻原裕敏 (forthc.) 「利用漢譯佛經研究出土胡語佛教文獻—以龜茲語文獻中所見《求妙法王》故事為例」『中国人民大学国学院創立五周年紀念論文集』, 北京: 中国人民大学国学院.

Peyrot, Michaël (2008) *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.

Pinault, Georges-Jean (2007) Concordance des manuscrits tokhariens du fonds Pelliot. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 163-219.

Sander, Lore (1968) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. (VOHD Suppl. 8). Wiesbaden: Franz Steiner.

Sander, Lore (1986) Brāhmī Scripts on the Eastern Silk Roads. *Studien zur Indologie und Iranistik*. 11/12: 159-192.

SHT = *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 1-4, Wiesbaden; Teil 5-10, Stuttgart: Franz Steiner, 1965-2008.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1933) Bruchstück eines Udānavarga-Kommentars (Udānālankāra?) im Tocharischen. In: Otto Stein and Wilhelm Gampert (eds.) *Festschrift für Moriz Winternitz zum siebzigsten Geburtstag*. Leipzig: Harrassowitz, 167-173.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 1. Die Udānālankāra-Fragmente, [I] Texte, [II] Übersetzung und Glossar*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragmente Nr. 71-633*. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

T. = *Taisho Tripiṭaka*.

玉井達士, Tamai Tatsushi, (2011) Transliterations of the Tocharian B *Udānālankāra* Fragments in the Berlin Collection. 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第14号: 81-125.

Thomas, Werner (1983) *Tocharische Sprachreste: Sprache B. Teil I: Die Texte. Band 1: Fragmente Nr. 1-116 der Berliner Sammlung. Neubearb. und mit einem Kommentar nebst Register versehen von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

*TochSprR(B) I* = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949).

Vaidya, P. L. (1958) *Avadāna-śataka*. <Buddhist Sanskrit Texts – No. 19>. Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

[Texts]

[Sanskrit] (Bernhard 1965: 172-173, 275, 392)

Udv. IX 9: *vilumpate hi puruṣo yāvad asyopakalpate |*

*tato 'nye taṃ vilumpanti sa viloptā vilupyate ||*

Udv. IX 10: *kurvaṃ hi manyate bālo naitaṃ mām āgamiṣyati |*

*sāmparāye tu jñāti yā gatiḥ pāpakarmaṇām ||*

Udv. IX 11: *kurvaṃ hi manyate bālo naitaṃ mām āgamiṣyati |*

*paścāt tu kaṭukaṃ bhavati vipākaṃ pratiṣevataḥ ||*

Udv. XX 19: *akrodhena jayet krodham asādhun sādhunā jayet |*

*jayet kadaryaṃ dānena satyena tv anṛtaṃ jayet ||*

Udv. XXX 1: *jayād vairam prasavate duḥkhaṃ śete parājitaḥ |*

*upaśāntaḥ sukhaṃ śete hitvā jayaparājayau ||*

[漢訳仏典]

『出曜經』卷 20

「忍辱勝怨 善勝不善 勝者能施 真誠勝欺

忍辱勝怨者。昔阿闍世王集四種兵。往攻舍衛城。時波斯匿王復集四種兵。出外戰鬪摧破大眾。生擒阿闍世。身將至如來所白世尊曰。姊子阿闍世。叛逆無道橫興惡意攻伐我國。本無怨讎自生怨讎。本無鬪諍自生鬪諍。今原赦其罪放還本國。何以故。為我大姊見放之。是故說忍辱勝怨也。善勝不善者。無功德人喜自稱說。吾所知多彼所知少。實無技術稱言有之。實無方略自言多方。臨事之際攝腹如步屈之蟲。若見智者無然獨立。如死肉聚無復神識。是以智者勸人積學。學者寧神之寶宅。心意自在通達四遠由學得成。營家立國法度邪非斯由學也。是故說善勝不善也。勝者能施者。所謂勝者勝彼慳貪。人不立德本者嫉彼妬賢。見人惠施代惜財貨。恒作是念。我施彼者後何所望。唯有立信之人乃能惠施。亦不選擇不願果報。乞者填門不立禁限。四遠雲集不距微細。是故說勝者能施也。真誠勝欺者。真誠行人宗室眷屬。所在稱揚無不聞者。妄語之人人見不歡人所憎嫉。是故說真誠勝欺。」  
(T.04, no.212, 715c29-716a22)

『雜阿含經』卷 46 「1236 經」

「如是我聞。一時。佛住舍衛國祇樹給孤獨園。時。波斯匿王。摩竭提國阿闍世王韋提希子共相違背。摩竭提王阿闍世韋提希子起四種軍。象軍馬軍車軍步軍。來至拘薩羅國。波斯匿王聞阿闍世王韋提希子四種軍至。亦集四種軍。象軍馬軍車軍步軍。出共鬪戰。阿闍世王四軍得勝。波斯匿王四軍不如。退敗星散。單車馳走。還舍衛城。時。有眾多比丘晨朝著衣持鉢。入舍衛城乞食。聞摩竭提王阿闍世韋提希子起四種軍。來至拘薩羅國。波斯匿王起四種軍出共鬪戰。波斯匿王四軍不如。退敗星散。波斯匿王恐怖狼狽。單車馳走。還舍衛城。聞已。乞食畢。還精舍。舉衣鉢。洗足已。往詣佛所。稽首佛足。退坐一面。白佛言。世尊。我等今日眾多比丘入城乞食。聞摩竭



提主阿闍世王韋提希子起四種軍。如是廣說。乃至單車馳走。還舍衛城。爾時。世尊即說偈言。

戰勝增怨敵 敗苦臥不安

勝敗二俱捨 臥覺寂靜樂

佛說此經已。諸比丘聞佛所說。歡喜奉行。」

(T.02, no.99, 338b29-338c20)

『雜阿含經』卷46「1237經」

「如是我聞。一時。佛住舍衛國祇樹給孤獨園。時。波斯匿王與摩竭提王阿闍世韋提希子共相違背。摩竭提王阿闍世韋提希子起四種軍。來至拘薩羅國。波斯匿王倍興四軍。出共鬪戰。波斯匿王四種軍勝。阿闍世王四種軍退。摧伏星散。波斯匿王悉皆虜掠阿闍世王象馬車乘錢財寶物。生禽阿闍世王身。載以同車。俱詣佛所。稽首佛足。退坐一面。波斯匿王白佛言。世尊。此是阿闍世王韋提希子。長夜於我無怨恨人而生怨結。於好人所而作不好。然其是我善友之子。當放令還國。佛告波斯匿王。善哉。大王。放其令去。令汝長夜安樂饒益。爾時。世尊即說偈言。

乃至力自在 能廣虜掠彼

助怨在力增 倍收己他利

佛說此經已。波斯匿王及阿闍世王韋提希子聞佛所說。歡喜隨喜。作禮而去。」

(T.02, no.99, 338c21-339a9)

『別譯雜阿含經』卷4「63經」

「如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。摩竭提國阿闍世王。將領四兵來。共波斯匿王。交陣大戰。時阿闍世王韋提希子。破波斯匿王所將軍眾。波斯匿王。單乘一車。獨得入城。時諸比丘。入城乞食。見是事已。乞食訖洗足。往詣佛所。頂禮佛足。在一面立。白佛言。世尊。我等晨朝入城乞食。見阿闍世王。及波斯匿王。各嚴四兵。極大鬪戰。波斯匿王。所將四兵。為彼所破。唯王一身。單乘一車。獨得入城。爾時世尊。聞斯事已。即說偈言。

勝則多怨疾 負則惱不眠

若無勝負者 寂滅安睡眠

佛說是已。諸比丘聞佛所說。歡喜奉行。」

(T.02, no.100, 395c7-395c19)

『別譯雜阿含經』卷4「64經」

「如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時摩竭提阿闍世王。及波斯匿王。各嚴四兵。交兵大戰。波斯匿王。大破阿闍世王所將兵眾。并復擒得阿闍世王身。波斯匿王。既得勝已。與阿闍世王。同載一車。來詣佛所。頂禮佛足。時波斯匿王。白佛言。世尊。此摩竭提阿闍世王韋提希子。我於彼所。初無怨嫌。彼於我所。恒懷憎嫉。然其是我親友之子。以是之故。我今欲放令得還國。佛言大王。可放令去。若能放彼王。於長夜有大利益。爾時世尊。即說偈言。

力能破他軍 還為他所壞

力能侵掠人 還為他所掠

愚謂為無報 必受於大苦

若當命終時 乃知實有報  
佛說是已。諸比丘聞佛所說。歡喜奉行。」

(T.02, no.100, 395c20-396a6)

[Pali]

SN:

I 3.2.4. Saṅgāma (SN I: 82-83)

*Atha kho rājā Māgadho Ajātasattu vedehiputto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānaṃ Pasenadi-kosalam abbhuyyāsi yena Kāsī ||*

*Assossi kho rājā Pasenadi-kosalo || rājā kira māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā mamaṃ abbhuyyāto yena Kāsīti || ||*

*Atha kho rājā Pasenadi-kosalo caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānaṃ māgadham Ajātasattum vedehi-puttam paccuyyāsi yena Kāsī || ||*

*Atha kho rājā ca māgadho Ajātasattu vedehi-putto rājā ca Pasenadi-kosalo saṅgāmesuṃ || || Tena kho pana saṅgāme rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto rājānaṃ Pasenadi-kosalam parājesi || parājito ca rājā Pasenadi kosalo sakam eva rājadhānim Sāvattim pāyāsi || ||*

*Atha kho sambahulā bhikkhū pubbaṇha-samayaṃ nivāsetvā patta-cīvaram ādāya Sāvattim piṇḍāya pāvisimsu || Sāvattiyam piṇḍāya caritvā pacchābhattam piṇḍapātapaṭikkantā yena Bhagavā ten-upasaṅkamimsu || Upasaṅkamitvā Bhagavantam abhivādetvā ekam antam nisīdimsu || ekam antaṃ nisinnā kho te bhikkhū Bhagavantam etad avocuṃ || ||*

*Idha bhante rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānaṃ Pasenadi-kosalam abbhuyyāsi yena Kāsī || || Assossi kho bhante rājā Pasenadi-kosalo || rājā kira māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā mamaṃ abbhuyyāto yena Kāsīti || ||*  
*Atha kho bhante rājā Pasenadi-kosalo caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānaṃ Māgadham Ajātasattum vedehi-puttam paccuyyāsī yena Kāsī || ||*  
*Atha kho bhante rājā ca māgadho Ajātasattu vedehi-putto rājā ca pasenadi-kosalo saṅgāmesuṃ || || Tasmiṃ kho pana saṅgāme rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto rājānaṃ Pasenadi-kosalam parājesi || parājito ca bhante rājā Pasenadi-kosalo sakam eva rājadhānim Sāvattim paccuyyāsīti || ||*

*Rājā bhikkhave māgadho Ajātasattu vedehi-putto pāpa-mitto pāpasahāyo pāpa-sampavaṅko || rājā ca bhikkhave Pasenadi-kosalo kalyāṇa-mitto kalyāṇa-sahāyo kalyāṇa-sampavaṅko || ajjatanī ca bhikkhave rājā Pasenadi-kosalo imaṃ rattim dukkhaṃ sessati parājito ti || ||*

*Jayaṃ veram pasavati || dukkhaṃ seti parājito ||*

*upasanto sukhaṃ seti || hitvā jayaṃ parājayan-ti || ||*

I 3.2.5 Saṅgāma (SN I: 83-85)

*Atha kho rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānaṃ*

*Pasenadi-kosalam abbhuyyāsi yena Kāsī* || ||

*Assosi kho rājā Pasenadi-kosalo* || *rājā kira māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā mamaṃ abbhuyyāto yena Kāsī ti* || ||

*Atha kho rājā Pasenadi-kosalo caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānam māgadham Ajātasattum vedehi-puttam paccuyyāti yena Kāsī* ||

*Atha kho rājā ca māgadho Ajātasattu vedehi-putto rājā ca pasenadi-kosalo saṅgāmesuṃ* || || *Tasmiṃ kho pana saṅgāme rājā Pasenadi-kosalo rājānam māgadham Ajātasattum vedehi-puttam parājesi jīvagāhaṃ ca nam aggahesi* || ||

*Atha kho rañño Pasenadi-kosalassa etad ahosi* || || *Kiñcāpi kho myāyam rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto adubbhantassa dubbhati* || *atha ca pana me bhāgineyyo hoti* || *yaṃ nūnāham rañño māgadhasa Ajātasattusso vedehi-puttassa sabbam hatthi-kāyam pariyādiyivā sabbam assa-kāyam pariyādiyivā sabbam ratha-kāyam pariyādiyivā sabbam patti-kāyam pariyādiyivā jīvantam eva nam ossajjeyyan-ti* || ||

*Atha kho rājā Pasenadi-kosalo rañño māgadhasa Ajātasattuno vedehi-puttassa sabbam hatthi-kāyam pariyādiyivā* || *pe* || *jīvantam eva nam ossaji* || ||

*Atha kho sambahulā bhikkhū pubbaṇhasamayaṃ nivāsetvā pattacīvaram ādāya Sāvattim piṇḍāya pāvisimsu* || *Sāvattiyam piṇḍāya caritvā pacchābhaddam piṇḍapātapaṭikkantā yena Bhagavā ten-upasaṅkamimsu* || *Upasaṅkamitvā Bhagavantam abhivādetvā ekam antam nisīdimsu* || *Ekam antam nisinnā kho te bhikkhū Bhagavantam etad avocuṃ* ||

*Idha bhante rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānam Pasenadi-kosalam abbhuyyāsi yena Kāsī* || *Assosi kho bante rājā Pasenadi-kosalo* || *rājā kira māgadho Ajātasattu vedehi-putto caturaṅginim senaṃ sannayhitvā mamaṃ abbhuyyāto yena Kāsī ti* || || *Atha kho bhante rājā Pasenadi-kosalo caturaṅginim senaṃ sannayhitvā rājānam Māgadham Ajātasattum vedehi-puttam paccuyyāsi* || || *Atha kho bhante rājā ca māgadho Ajātasattu vedehi-putto rājā ca Pasenadi-kosalo saṅgāmesuṃ* || *Tasmiṃ kho pana saṅgāme rājā Pasenadi-kosalo rājānam māgadham Ajātasattum vedehi-puttam parājesi jīvagāhaṃ ca nam aggahesi* || *Atha kho bhante rañño Pasenadi-kosalassa etad ahosi* || *Kiñcāpi kho myāyam rājā māgadho Ajātasattu vedehi-putto adubbhantassa dubbhati* || *atha ca pana me bhāgineyyo hoti* || *yaṃ nūnāham rañño māgadhasa Ajātasattuno vedehi-puttassa sabbam hatthi-kāyam paridāyivā* || *sabbam assa-kāyam* || *sabbam ratha-kāyam* || *sabbam patti-kāyam paridāyivā jīvantam eva nam ossajjeyyan-ti* || || *Atha kho bhante rājā Pasenadi-kosalo rañño māgadhasa Ajātasattuno vedehi-puttassa sabbam hatthi-kāyam pariyādiyivā sabbam assa-kāyam pariyādiyivā sabbam ratha-kāyam pariyādiyivā sabbam patti-kāyam pariyādiyivā jīvantam eva nam ossajjīti* || ||

*Atha kho Bhagavā etam atthaṃ viditvā tāyaṃ velayam imā gāthāyo abhāsi* || ||

*Vilumpateva puriso* || *yāvassa upakappati* ||

*yadā c-aññe vilumpanti* || *so vilutto vilumpati* ||

*jhānaṃhi maññati bālo || yāva pāpaṃ na paccati ||*  
*yadā ca paccati pāpaṃ || atha bālo dukkhaṃ nigacchati || ||*  
*hantā labhati hantāraṃ || jetāraṃ labhati jayaṃ ||*  
*akkosako ca akkosāṃ || rosetāraṇ ca rosako ||*  
*atha kamma-vivattaṇa || so vilutto vilumpeṭṭi || ||*

### 3. Kosalarañño parājaya vatthu (Norman 1970: 259-260)

*jayaṃ veran ti imaṃ dhamma desanaṃ Satthā Jetavane viharanto Kosalarañño parājayaṃ ārabha kathesi.*

*So kira Kāsigāmaṃ nissāya bhāgineyyena Ajātasattunā saddhiṃ yujjhanto tena tayo vāre parājito tatiyavāre cintesi: 'ahaṃ khīramukhaṃ pi dāraṃ parājetuṃ nāsakkiṃ, kiṃ me jīvitenā 'ti so āhārūpacchedaṃ katvā mañcake nipajji. Ath' assa sā pavatti sakalavihāranagaraṃ patthari. Bhikkhū Tathāgataṃ ārocesuṃ: 'bhante rājā kira Kāsigāmaṃ nissāya tayo vāre parājito, so idāni parājitvā āgato "khīramukhaṃ pi dāraṃ parājetuṃ nāsakkiṃ, kiṃ me jīvitenā" ti āhārūpacchedaṃ katvā mañcake nipanno' ti. Satthā tesāṃ kathaṃ sutvā 'bhikkhave jinanto pi veraṃ pasavati, parājito pana dukkhaṃ seti yevā' ti vatvā imaṃ gāthaṃ āha:*

*'Jayaṃ veraṃ pasavati dukkhaṃ seti parājito*  
*Upasanto sukhaṃ seti hitvā jaya parājayaṃ 'ti.*

### 追記

筆者は、『東京大学言語学論集』30号に「トカラ語 A «Bṛhaddiyuti-Jātaka» の部派帰属について」という論文を発表したが、論文発表後、拙稿で扱った«Bṛhaddiyuti-Jātaka»が、Kucha の Kizil 第 32, 38, 80, 171, 206 窟に描かれている事を知った。この壁画の比定と、筆者が当時気づいていなかった参考文献については、下記の論文を参照頂きたい。なお、この論文についてご教示頂いた龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員の橘堂晃一氏には、特に記して感謝申し上げます。

ZIN, Monika

2007 The identification of the Kizil paintings II. *Indo-Asiatische Zeitschrift* 11: 43-52.

«Bṛhaddiyuti-Jātaka»の壁画の比定は pp. 46-51 で扱われており、拙稿で扱ったトカラ語 A のテキストも、Sieg (1944) の訳文で参照されている。

## On the Quotation of an *Avadāna* Text in the *Udānālaṅkāra* in Tocharian B

OGIHARA Hirotoshi

**Keywords:** Tocharian B, *Udānālaṅkāra*, *Avadānaśataka*, (Mūla-)Sarvāstivādin

### Abstract

Among the Tocharian B Buddhist texts, there is a literary work entitled the *Udānālaṅkāra*, a commentary on the *Udānavarga* in Sanskrit. According to this text, the author is called *Dharmasoma*, although neither his work nor his name has been known to the Buddhist Sanskrit literature yet. The transliteration of this text kept in the Berlin and Paris collections was published by E. Sieg and W. Siegling and by S. Lévi. This text reveals that the *Udānavarga* in Sanskrit had prevailed in Tocharian Buddhism. However, the *Udānālaṅkāra* has not yet received the attention that it deserves.

In this paper, I will discuss the textual material used in the *Udānālaṅkāra* in Tocharian B. According to my research, the *Avadāna* text which is entitled *Rājā* as the 10<sup>th</sup> text in the *Avadānaśataka* in Sanskrit is quoted here as the narrative attached to Udv. IX 9.

On the other hand, the texts similar to this *Avadāna* text are found in the Āgama texts and the commentary to the *Dhammapada* in Pali and that to the *Udānavarga* in Chinese. The comparison of these texts could show that the original tale connected to this verse would have been replaced by this *Avadāna* text in the course of the compilation of the *Udānālaṅkāra* in Tocharian. If my hypothesis is accepted, it follows that no original Sanskrit text existed that corresponds to the whole text of the *Udānālaṅkāra* in Tocharian. In other words, the *Udānālaṅkāra* in Tocharian would be the original work compiled within Tocharian Buddhism.

(おぎはら・ひろとし 中国人民大学国学院)